

「いま月にいるんですけど、地球ってホントに青いんですね。じゃあもう先輩とは二度と会いませんから。さよなら」

暗闇の中にくつきり浮かんだ地球の写メで私は一年半付き合ってた紗織から振られる。もうみんな死んじやえて思う。学校を休んで晴香の家で怠惰な生活を続けて一週間たった日の夜だった。紗織の声がべたべたべたシロップみたいに離れなくていい加減参ってしまったって眠りも浅くなる。それまでどうでもよかった色々がもつとどうでもよくなってしまふ。まどろみか頭の中でふんわりと染み渡ったままうんと呻き寝返りを打つと、窓の向こうには夜明けを裡に抱えながら未だに深く藍色をした午前四時ごろの世界が見えた。

隣で眠る晴香を起こさないようにベッドを出てからベランダへと抜ける。裸足の裏にあるひんやりとしたアルミニウムの感触にこそばゆさを憶えながらぼんやりと私は手すりに体を預け景色を眺める。ちりばめられた星々の瞬きはかすかでその下にある静けさに浸った家々の間を猫が尻尾を立てながら歩いている。まだ眠りの中にあるこの世界はまるで息をすれば崩れてしまいそうなくらいに粗く脆い粒子で作られている模造品みたいで、そんなよそよそしい錯覚を新聞配達の一輪車が発するけたたましいエンジンの音が遮る。けれどそれが残滓になると再び世界は少しだけ嘘に近づいてゆく。

「……あれ、叶、おはよ」

体を起こして目をこすりながら声をかけてくる晴香は私と同じ年。なのに私よりずっと凛々しくて耳が見える長さで切り揃えた髪は少年のようななたしかな精悍さと鋭さを与えている。鋭敏なのにどこか濡れたようなその瞳も寝起きには僅かに少女らしい無防備さを覗かせていた。「うん、おはよう晴香。ごめん、起こしちゃった?」

「ううん大丈夫。けど珍しいね、こんな時間に」ちよつとねと返事をして視線を外に戻すと地平線から薄明が滲んできていて、一晩ほのかな光で世界を照らしていた月は空の隅へと動いている。あのかかに紗織はいる。けれど今の私にはどうしようもない。朝刊を取るために玄関の扉を開ける音がどこからか聞こえる。にわかにか動き始めた街に時折さえずつている鳥の名前を私は知らない。

「ねえ、やっぱり紗織ちゃんのこと考えてるでしょ」

「……晴香のこと考えてるよ」

一昨年の七月に初めて知り合ってから晴香とはお互い都合の良いときだけ体の温もりを頼ることになっている。それまでも私はなにかと女の子に好かれていて、十四歳のときに川岸沙耶に告白されてから中学の間は佐藤晶や河下麻子や青梅亜季とも付き合った。彼女たちが声をかけてくれるまで私は彼女たちのことを少しも知らなかったのに好意を向けられた途端それが誰でもこの子を大切にしたいいなあという手の付けられない感情が私を支配するようになってしまふ。それから一緒にごはん食べたたり手を繋いだり買い物に行ったり部屋で何もせずいたらだらだらしてたり、それ以上のこととも色々する。拙いなりに恋人みたいなことをするようになる。すると最初の頃はぎこちなく指先から伝わるだけだった体温がいつの間にか私の心にするごとく入り込んで気がつかないうちに居場所を確保している、思わず私はため息をついてしまふ。もつと好きになってもらうにはどうしたらいいのかとか悩み始めてお洒落だつてしてみたりするのだけれど、そんな幸せをかならずあの一言が台無しにする。

「ねえ、叶は本当に私のこと好き?」

それを初めて訊ねたのはやつぱり河岸沙耶で、「ごめん、下らないこと聞いてちゃったよね」と笑うのだけれど私はよそよそしく接するようになってしまつて結局沙耶から振られる。好きという気持ちに本当